

歌読む窓辺

横書きのうた読む窓辺ゆるやかにわが感官は昂ぶりそめつ 花

炎帝の腋の下から突き抜けぬ ゆふらりゆらと汝は崩れぬ 海月

南溟に台風生るるこのゆふべ海月のやうな望の月出づ かわせみ

われに会うため咲きくれし花かとも月下烟れるライムライトは 花

遙かなる富嶽に降りし氷雪の今湧き出づる柿田の水は 蘇生

柿田川みなもにうつるわが影にこひをしてゐるかはひらこひら かわせみ

水飛沫上げつつどよむ滝の辺の沙羅の花なる我が思ひかも 海斗

瑠璃玉を飾りし胸の谷間より夏蝶翅をひろげ翔たむと 真奈

夏山の木の下闇の静けさに飛び交う蝶の婆沙羅婆沙羅と 海斗

胸に咲く一輪ありきさわされど頂垂れてゆく片陰の道 花

いづこへか風に向かひて海原を紙片のごとく蝶は舞いゆく 蘇生

蝶のよう蜂のようにと語られた病身のアリの深い眼差し 海斗

展翅して動かざるものゝ並みけり不思議の桃の誰彼も欲し 紅

この世ではここが桃源郷なのか塔婆に止まるミヤマアカネよ 花

名もしれぬ夏蝶翔べり裏の川 銭湯にゆく牛乳飲みみ 海月

一刷けに道塗り替えし大夕立つっかけで行くセブンイレブン 花

夏蝶を追えば格子の街の中藍の反物十貫しよって ぼぼな

焼くものを追へばお好み鳥たこそば生ビールありいざ花火待つ 海斗

花火待つ天神祭りのお役者のうなじちりちり夏の陽の灼く かわせみ

江戸の風着こなして飛ぶ夏燕打ち上げ花火の宵の涼しき

真奈

手花火のうしろに誰か立っているポトリと落ちし小さき火の玉

花

ささげたる掌に受け揚花火どうんどうんと胸の高波

紅

潮汲めば音なく点る夜光虫こぼるるままにわが掌

蘇生

夜光虫わが腕より零れ落つ星あるを知る諏訪瀬の夏

海月

青光るその掌に抱け黎明に膨らみたわむとほき山脈

かわせみ

生まれたての蝉は若葉の色をして朝日に濡れた羽根をひろげた

海斗

蝉なくと誰かささやく未明です夢の淵より薄目をあけて

花

蝉時雨ただ暑かつた腹減つたそんな日が来る忘れずに来る

海月

列島の寒さの夏の今年の今日の暑さの蝉時雨かな

蘇生

六本木ヒルズアリーナ七月の葉加瀬太郎のLive聴いてる

花

空間と時間共有する奇跡軽んずべからず蝉時雨をり

ぽぼな

炎昼の盛んなるかな蝉の声憂うるようなる夕べひく声

蘇生

蝉もまた一夏の過客夕されば群唱のこえ遠ざかりつつ

花

相似たる野の花なれどそれぞれに季の移りにかわりゆくなり

蘇生

油照り油蝉ああ兄の忌の久のふる里瞳孔開く

しゅう

夕光のなかに不動の向日葵よ首のみ垂れて禱りのごとく

花

我もまた空をゆく雲 たたみこも平群の檜に蝉時雨満ち

かわせみ

めぐる季のいつでも恋うる長崎かも風見治著「季時」ゆしゅう

空の果て地の果て往かんめぐる季 内耳音鳴る海も閃れば

海月

根府川の海よカンナの咲く駅よ今年また不羈の朱に満ちたり

真奈

気が変わり一駅手前で降りゆけばポンポンダリアが機嫌よく咲いてた 花

もう一駅が行き着けぬ脳天に待ち針入りてダリア乱れる 海月

行きゆけど永久とほにとどかぬ次の駅 足裏あしひ貼りつく灼けし鉄路に かわせみ

無名なる安息にいてされどまた涉りかゆかむ銀河鉄道 花

ああ、ぼくは行かねばならぬどこまでもサウザンクロスにもろて双手さしのべかわせみ

行き往けど片道切符海の底ほたる舞いたる銀河鉄道 海月

吊革を掴む幼子将来はウルトラCよ父は「もういいか」 海斗

宿題の針穴写真「ウルトラの父」いまもなほ倒立のまま かわせみ

波さゆれかぐるきまでに倒立の一樹はわれの父かもしれぬ 花

犬と猫ちいさき仕事われにあり無言の父母にまた酷暑くる 海月

炎昼の汗止めどなくTシャツの胸にまつはる我が恋心 海斗

人の上に人をひたすら積む辺りプラトニックに起重機赤し ぼぼな

男とは花より淡くすぎにしと臆アカシアは花を零して 花

雨けぶる花房白き針ハツリエンジュ 槐にセアカシアというは哀しき 蘇生

曼荼羅華・ダトウラ・エンジェル・トランプット致死量ほどの毒嘉すべし 花

暮れなずむ凧に聳ゆる富士の山わが心には曼荼羅華かな 蘇生

曼珠沙華メッキ工場どぶの川致死量たまるアメリカ輸出 海月

どぶに落ちる瞬間に知るせせらぎの清けき音の次に知る痛み 海斗

片恋の形而上的わたくしは影一枚と溜息一つ ぼぼな

永遠にならぬか明日か係恋のわが裡の暗渠しずかに流るる 花

ふた年の別居の夫を両腕に熱帯のキス曾我ひとみさん しゅう

唇をあわせしことも一炊の夢ひそやかに沙羅の花咲く 花

宿業を憐れみ給ふ如来像の唇慕ふやるせなき思ひ 海斗

木下闇ゆらと頭ちくる石仏の声くぐもりて昏々と朱夏 花

鼻欠けの交通地藏に蝉時雨花を置きしが係累絶えたか 海月

大隈半島(おおすみ)の野面に晒す石像の仁王の貌の親しも娑婆ゆしゅう

をさなげな野仏ふたつよりそひて蔭にさびしく苔にをりけり 蘇生

おさなごがつむり撫でやる野仏のまなこやさしく微笑むと見ゆ 茉莉花

人はみな幼きころはかくあらんに矜羯羅童子を不意に思うも 花

ははそはのははのみはらにやどりてしころを偲べる子守唄かも 海斗

羊水の湖に小舟を浮かばせて生まざる吾子があくびをしてる 花

泣きし嬰こが羊水の音すスーパーの袋の擦れる音に笑みにし しゅう

わが戸籍入らずの妹ふたりいる午睡から覚めてひつじぐさ咲け 海月

みどりこの命は絶へて骨とせば四十九日に水に還ると 海斗

反芻は砂噛むごときひとり居て真水に心さらしたき宵 寂

貝釦掛け間違えた午前五時向いの島に雷雨の兆し ぼぼな

雷雲はすでに妖しく西ゆくに常選択をあやまちて来つ 花

過てりまた過てり夏雲になんだかんだと猫と遊びつ 海月

感情のやりとりできる眼もてひとつベンチに猫と坐れり 花

serious じ mysterious じ 七月は手染めの丹と紺と消え行く ぼぼな

七月の尽きし日中の会堂に七十兄妹の笑みあふれたり(増伴八周年記念句会) 蘇生

暑いからこれは飲まねばなりませんませぬ訳はともあれ笑みが笑み呼ぶ やんま

憧れは憧れのまましばらくはここでグラスを掲げています（祝増伴八周年） ぼぼな

増伴のページを開けまだ三ヶ月お写真前に先づは乾杯 真奈

つぶやく堂増伴歳時記桃李歌壇主宰三者の個性輝く（於増伴八周年記念句会） 蘇生

氣をもらふ桃李つぶやく連衆にけふも駄句ゝ汗もだくたく 海月

面白や記念句会の水中花手品の如き二人のロゴも 丹仙

あなたが楽しかったねと言ったから今日のこの日は俳句記念日 海斗

蜂蜜の昨日は去れど今日もまた桃李まで来ぬ花を探しに ぼぼな

桔梗のうつつを裂きて咲く力言葉もて人を殺めてはならぬ 花

ほどのよき風に小庭の笹竹の今は茂りて過ぎたる如し 蘇生

「水に書く文字のようだね」と万智さんはチヨコかじりつつ空を見上げる 真奈

行く川の水の流れは絶えざれど瀬音かなしもひとみとぎして 海斗

五時ですよ紫陽花の下のが云ふ朝な夕なと水と缶詰 海月

エノラ・ゲイなほスミノアんに生きてをり「平和」のための「悪」を謳へり 真奈

国敗レタンダロ原爆落トサレタンダロ老婆の視線の先には誰もいない 海斗

薄明の厨にたちて一本の匙磨きおり今日原爆忌 花

銀の匙握りて笑ふ嬰兒よ忘れ給うなその笑みをこそ 海月

電話にて仮免取れたとはしゃぐ娘よ屈託無き笑顔消させぬぞ母は 雛菊

身籠りの報せ受けたる携^{けいたい}帯電話の着信音は Yesterday once more かわせみ

桃李和歌連作百首歌集

第五八〇一首より五九〇〇首迄

平成一六年七月十五日より平成一六年八月七日迄